

# 隨泉寺寺報

平成28年（2016年）9月号 第553号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

## 秋季彼岸会法座

講師 西方寺住職 安国真雄師

講題 『不疑と無疑』



☆ お彼岸は春と秋との2回あり、春分・秋分の日を中日（ちゅうにち）とし、前後3日を合わせた7日間をいいます。

「暑さ寒さも彼岸まで」といわれるように、日本人特有の微妙な季節感や日本の風土とあいまって、すっかり日本人の生活の中に定着しています。お彼岸は、本来、彼岸会（ひがんえ）といいますが、彼岸の入りまでに、仏壇を清掃し、彼岸団子や、ぼたもち（春）やおはぎ（秋）などの供物を供えます。そして家族揃ってお仏壇にお参りし、いのちのことを考えてみましょう。その後みんなでお墓参りをします。

### 9月の法座予定

- 9月 2日……………本部役員会
- 9月 11日午前……………掃除 長者原西
- 9月 15日朝席午前10時より……………主婦の集い お齋
- 9月 15日昼席午後1時より……………秋季彼岸会法要
- 10月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会



☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話—

9月

「自力の念仏そのまま他力とわかる時がくる」 （木村無相）

長かった夏が終わり、お彼岸の時期になりました。猛暑・大雨洪水・台風・地震・火山噴火と恐ろしいことが続いた夏でしたが、被害や影響を受けられた方がいらっしゃることでしょう。各自、一応の備えはあっても、万全というわけにはいきません。無事を祈りたい気持ちは自然なことですが、それも保障にはなりません。



「まさか」ということがあるのが人生と受け止めなければなりません。ですから、人生の根本を、他人と較べて、勝った負けたに置いたのでは、不安やねたみが増すばかりで、他のいのちを傷つけ、自らを傷つけて迷いを深めることになりません。大切なことは、恵まれたいのちを精一杯生きているかどうか、他のいのちを活かしているかどうかではないでしょうか。

限りない光といのち、智慧と慈悲の阿弥陀如来さまは常に、私のいのちを気に掛け、喚びかけ、照らしていただきます。その事になかなか気付かない私ですが、大きな出来事にであうと、ようやく、阿弥陀如来さまにお育てを受けてきたことに気が付きます。私一人のいのちではなかったのです。そこから、お念仏の人生、往生浄土の人生が開かれます。その上に、一時ひとときを大切に生きる生き方、さざまないのちの繋がりを大切に生きる生き方を育ててゆきたいと思います

### ☆ まだ間に合います。友人のお寺での話

ご門徒さんが、終活しているので京都の本願寺に参りたいと申し込みをされた。まだ法名をもらってないので是非とも貰わなければ死んだときに恥をかくので連れて行ってくれとのこと。そろそろ死の準備をしなければと思ったなら死んだらどうなるのかと思い始めたそうです。せめて法名だけでも貰いたいということだそうです。皆さん、死の準備はできていますか？終活はいかがですか？身の回りの整理も終活ですが、やがて命尽きて自分の帰るところを見定め、仏弟子としての名乗りを確かなものになりたいということも大切な終活だと思います。皆さん本願寺へまいりましょう。まだ間に合います。

## 聞くということは 吸収すること

私は長い間、教員をやってきました。私たちは、授業の一環として、話し合いという時間を設けています。しかし、私は九州から北海道まで、あちらこちらの授業を拝見させていただいて、これが本当の話し合いだというのは、ほとんど出会うことができません。言い合いなんです。そして言い合いだから討議になります。討議はやつつけ合いです。

本当の話し合いというのは、じつは聞き合いなんですね。だから今の若者たちの像を漫画で書くとすれば、文句はよく言うようになったから、口は相当に大きい。大きいだけでなく、人をやつつけるような口ですから、するどくどとがって発達している。目は、よろこびやしあわせが、いっこうに見えず、見えるのは不平、不満ばかりで、飛び出した目になる。耳はどのように書けばいいかといえば、あるかないかの点ぐらい打っておけばいいのではないのでしょうか。聞くということを粗末にして、やつつけ合いを育てることが、子どもの自主性を育てることだと考え違いをしてきたようです。

私は、これが本当の聞き合いだなと思いましたが、北海道の根室のある小学校を訪れたときでした。ここは千九百人の児童数の大きな小学校ですが、一年生の教室で子どもたちが話しているのを聞くと、子どもの顔ってこんなにも美しいものかなと思うほど、輝いた顔で話しているその声が、私の声のようにとがっていないのです。



それはどうしてかといいますと、本当にいい顔して相手の言葉をうなずいて吸収して聞いているから、とがった声でなく、しみ込んでくるような声になつていのです。そして他の子どもがしゃべり出すと、みんなは身も心もそちらに向いて、うなずきながら聞いている、これが本当の話し合い、聞き合いなんですね。

## ☆ 相模原・障害者施設津久井やまゆり園の殺人事件に思う

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市にある障害者施設『津久井やまゆり園』で、元職員だった犯人により、入居している障害者が19人刺殺されるという痛ましい事件がありました。犯人は犯行後、近くの警察署に自首してすでに捕まっていますが、なんとこの犯人はこの障害者施設『津久井やまゆり園』の元職員で約3年2ヶ月もの間務めていたというのです。さらに驚くべきなのは、この犯人は障害者が大嫌いで『障害者は社会的に不要な存在だから死ぬべきだ』という思想を持っていたとのこと。

この事件は、言葉にならないほどの痛ましい事件です。亡くなられた方々の無念はいかほどばかりか想像を絶します。寿命というものは歎異抄にも「娑婆の縁つきで、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。云々」とあります。命の平等こそ御同朋御同行の実践の根底であると考えています。

命の軽重が経済的な効果によってのみ評価されているような気がしてならないのです。自己実現は、競争と序列化の中で生き残った者のみに与えられ、貧困は自己責任として顧みられない現実があるような思いが強くなります。

『唯我独尊』というのはどの命もすべて尊い、命の重さに軽重はない。私一人というのは、どの私もみな尊い命ということです。私もあなたもどの人も、いやすべての命が、かけがえのない、かわることができない尊い命です。

## ☆ 高畑祐太事件に思う

高畑淳子さんは黒に白いストライプが入った洋服で登場。「この度は大変なご迷惑をかけました。大変なことをしてしまいました」と深々と頭を下げ、涙ながらに謝罪しました。息子に「一生かけてつぐなっていくけないといけない」と説いたという。「でも、私はどんなことがあっても、お母さんだからと言ったのを覚えております」と涙を浮かべた。「子を持つ親として」「もし、自分の子どもが犯罪を犯してしまった…」という気持ちでも、この事件を考えます。子どもを育てる親として、「被害者の親」「加害者の親」になる可能性がゼロとは言いきれないということを、改めて考えさせられました。

しかし親はどんな状況になろうとも親です。子供を見捨てることはありません。阿弥陀様も私たちを見捨てられることはありません。いのちの親だからです。